

「共話」の教育において学習者の認識に注目する重要性

田所 希佳子
ボルドー・モンテーニュ大学

要旨

「共話」とは、話し手と聞き手が一体となって談話を進行させていく日本語会話の特徴である（水谷 1983）。話し手と聞き手の気配りによって成り立っており、技術というよりは心の持ちようである（黒崎 1995）が、心理的抵抗を示す学習者もおり、心理面への配慮が必要となる。本研究では、「共話」の教育について考察するために、学習者は「共話」をどう捉えるのかという学習者の認識に注目し、日本国内外の学習者6名を対象に「共話」について考える授業を行った。相槌や言い換え場面において当事者双方に誤解や違和感の生じた箇所を編集した映像教材を視聴した後、再生刺激法によるインタビュー資料を読み、誤解や違和感の要因について話し合いを行った。「共話」を気配りと捉えるかどうかには、外国人扱いされることに対する態度など個人的要因が絡んでいるため、他者の多様な認識を知り、視野を広げる機会を設けることが重要になるのではないかと示唆された。

【キーワード】 相槌、言い換え、会話、コミュニケーション、印象

1 「共話」とは

1.1 定義

「共話」とは、水谷（1983）の造語であり、「ひとつの発話を必ずしもひとりの話し手が完結させるのでなく、話し手と聞き手の二人で作っていくという考え方にもとづいた」（水谷 1993、p.6）話し方である。欧米の断言型の「対話」と対比される。

1.2 「共話」の類型

1.2.1 母語場面（黒崎 1995）

黒崎（1995）は、「兵庫県滝野町における年層別・男女別方言談話資料」という方言談話と『徹子の部屋』の文字化資料を材料に、母語場面における「共話」を分析したものである。「共話」を先取り型、補足型、助け舟型、言い換え型、共感型の5つに分類している。

1.2.2 接触場面（笹 2007）

異文化間コミュニケーション場面における「共話」を考察したものに笹川（2007）がある。母語場面と接触場面計48組の初対面会話を比較分析している。接触場面における「共話」の類型は以下の表1の通りである。笹川（2007）は、「共話」が接触場面にも表れること、一つ一つの発話レベルのみならず様々な談話レベルで起きていることを明らかにした。

表1 接触場面における「共話」の類型（笹川 2007、p.38）

<input type="checkbox"/>	笑い、あいづちやパラフレーズ、オーバーラップにより共感を示す共話。
<input type="checkbox"/>	文レベルで起こる共話。文の後半をもう一人の話者が引き継ぎ、完成させる一文を

	共同で創る共話と、推測、共感表現を添える共話がある。
□	共感を表現する以外の、励ましや誉め、謙遜表現に対する否定など、より積極的な発話行為により相手と協調関係を志向する共話。
□	文を超えた、談話レベルで起こる共話。助け舟型、共話連鎖、共感表現の増幅、共話的な話題交換、先行話題導入による共話。

1.3 「共話」の教育における課題

黒崎 (1995) は、「共話は、すべてを言い尽くさず相手に発話完結の機会を与えようとする話し手側の気配りと、積極的に共感の情を表そうとする聞き手側の気配りによって成り立っている。」(p.59) とし、技術というよりは心の持ちようであるため、日本語を学ぶ外国人には、理解や習得が難しいものであると述べている。また、水谷 (1980) は相槌について、「相手の話が終わらないうちに口をはさむのは失礼である、という感情が働く」(p.91) という理由から、欧米人の学習者の中には、抵抗を示す者もあるとしている。以上のことから、「共話」は、学習者の心理面への配慮が必要となる学習項目であるといえる。

2 目的

本研究では、学習者の認識に注目し、「共話」の教育について考察する。そのために、学習者一人一人は「共話」をどう捉えるのか、話し手はなぜ「共話」ををすると思うか、聞き手は「共話」をどう捉えていると思うかといった、学習者の認識を題材とし、具体的な会話場面を例に、「共話」について考える授業を行った。

3 映像教材

まず、接触場面初対面会話を録画し、再生刺激法によるフォローアップインタビューを行った。次に、好印象・悪印象や違和感の見られた箇所を編集し、スピーチレベル (田所 2014ab)、話題選択 (田所 2015)、「共話」という項目別の映像教材を作成した。今回扱ったのは、「共話」を題材としたキムとあやの映像教材 (<https://youtu.be/jehzDIJpWdc>) である。

表 2 映像教材の参加者の詳細

仮名	年齢	学年	出身地	母語	日本語学習歴	日本滞在歴
キム	34 歳	博士 3 年	韓国	韓国語	韓国の日本語学校で半年 独学で 1 年半	2 年
あや	25 歳	修士 2 年	東京	日本語		

映像教材には右の写真のように字幕をつけた。

映像教材で視聴した部分の文字化資料は以下の表 3 の通りである。文字化はザトラウスキー (1993) に準拠して行った。



4.2 学習者の反応

映像教材を視聴した後の学習者は、以下のようにキムに対して好印象であった。

- ・楽しい会話ができるようにあやさんが頑張っていた。キムさんの気持ちを分かっているみたいだ。(イスマン)
- ・あやさんはすごく留学生と話すのが慣れてるような感じがする。(イム)
- ・あやさんは頑張って話を解説してくれますね。「うんうんうん、ふーん」だけの返事ではなく、相手の話の内容をまとめてくれた。たぶんなるべく好印象を持ってもらえるように頑張っている感じ。(ツェー)

4.3 あやの相槌(表3の青の円の部分)に関して

あやの相槌に関して、キムは否定的であった。詳細は以下の通りである。

<キムのインタビュー資料>

- ・あやさんの話す速度が私より早いので、ちょっと緊張感が生じて不快だった。悪印象。
- ・うんじゃなくてうんうんうんとか、早めに答えますので、あ一分かった分かったって感じて、もっと長く話してもいいかどうか困った。
- ・同じ国の人でも、そういう問題が起こると思いますが、私は外国人だからちょっと速度とか全体的に思いやりが必要なんじゃないかなって思いました。

あやも同様に、否定的な印象を持っていた。

<あやのインタビュー資料>

分かったのに説明が長いなって。私に分かったのが伝わってないのかなと思いつつ、でもまあいいかなと思った。説明が若干長いと思っていました。

以上のインタビュー資料を読んだ学習者たちの反応は以下の通りである。

- ・私たち外国人は話がちょっと遅いので、日本人は私が言いたいことを言う前に「はい」とか「ええ」とか言っちゃう。それはすごく失礼。でも、日本に長く住んだら、そういう日本人の話し方に慣れて、自然にこういう感じになると思う。(イスマン)
- ・「うんうん」って何度も言う時は、興味がないというよりも「分かったからじゃあ次」っていう感じがする。(イム)
- ・日本人と同じように接してくれていて良いと思う。配慮してくれるのは何か差別みたいで嫌だ。普通のスピードで、自然と接してくれたら良い。(ヨウ)
- ・私も普通に接した方が良いと思う。私の日本語が足りなくて話が続かないと嫌になる。配慮してもらわなくても、私が頑張ってそのペースについていける。話の内容はたいてい理解できるから、核心的な部分をつかんで、話題を膨らませられる。(ツェー)
- ・あやさんは相槌が多すぎ。私の日本人の友達も全然邪魔しない。(ウォン)
- ・たぶんキムさんの日本語はそこまで上手じゃないから、あやさんはずっと「あ一分かってるよ、聞いてるよ」と励ましていた。(略) 自分もあやさんのように「はいはいはいはい」と言った経験がある。卒論のインタビューで、「分かってる分かってる分かってる」という意味で相槌したが、後から録音したものを聞いたらうさかったし相手に失礼だと思ったので、それ以降相槌を多く入れないように気を付けた。(ホン)

4.4 あやの言い換え(表3の赤の円の部分)に関して

<キムのインタビュー資料>

- ・この部分は、私がまだ話し終わっていないのに、相手が話を切って先に答えた部分。私をもっと話したいことが確実にありましたけれども、急に忘れて、まあいいやって他の話をしちゃいました。
- ・日本語がちょっと足りないから私を手伝ってくれたのか、もしくは私が何を話したいのか分かったので、先に言ったんじゃないかなって。ちょっと悪印象。最後まで聞いてから言ってほしかった。日本語が足りない状態でも、そのままであくまで聞いた後で答えたほうがいいんじゃないかなと思います。残念でした。

<あやのインタビュー資料>

こっち側から言葉を提案してるけど、決してうなずかず、自分で説明したいんだなって思っていました。結構こだわるなあと思いながら聞いてました。あと私余計なことしてるかもしれないと思いました。ちょっと違和感。(略) こっちの言葉を使わずに最後まで説明したじゃないですか。ま、違和感といえばちょっと違和感という感じですか。日本人でもそういう人はいるから別に気にはならない。でもこだわりというか、悪いとか気にするとかいうよりは、そういう人なんだなって。だから何も言わずに最後まで黙って聞いていればよかったなって思いました。

以上のインタビュー資料を読んだ学習者たちの反応は以下の通りである。

- ・嫌な感じ。こういう細かいことは気にしてないんですね、私たちは。ただの続きだなと思ってるんですけども。(イスマン)
- ・相手はゆっくりしゃべってるから「じゃあちょっと文章終わらせてあげよう」みたいな感じ。留学生の立場から見ると頭の中で頑張ってるから、文章作ってるから、それ遮られると一瞬頭が真っ白になったりする。日本初めて来た時はそういうの結構あったんです。今は特にはない。お互いに話適当に突っ込みながら話すから。(イム)
- ・留学生はゆっくりしゃべるから、ちょっと空白が入るとたぶんここで文章終わったんだなって思って日本人が何気なく話を進めてしまったりするのはあると思います。(イム)
- ・先生が話す時はありますね。私が説明に困ってる時先生が助けてくれます。新しい言葉の学びにもなるので、先生が助けてくれると、次回私が同じ概念を説明しようとした時にその単語が使える。教えてくれたって感じがします。(ツェー)
- ・私的にはキムさんなめられたくないって感じがする。私のレベルは低いんですけどこの概念私も言えるよ、っていうのを表現するために最後まで続けたい。(ツェー)
- ・私がキムさんだったら、「そうですね」って終わらせる。それが普通だなと思う。(ヨウ)
- ・確かにその時々助けをもらいたくありません。香港でも広東語で話しかけたのに北京語で返されたらすごく嫌な感じがします。広東語は18歳から勉強しましたから、アクセントとか微妙に違います。相手の北京語のレベルは時々私の広東語のレベルより低いんですけども、一生懸命私を助けるために北京語で話されたら、私の広東語は微妙ですよと言われたみたいだ。(ホン)

5 「共話」に対する学習者の認識のまとめ

「共話」を気配りと見なすか、あるいは見下されている、邪魔だ、失礼だと見なすのか、また、自分を外国人として思いやりを持って接してほしいのか、逆に日本人と接する時のように自然に接してもらおうほうがいいのか、といった多様な認識が見られた。これらは、プライドや性格と関わる個人的な問題であるといえる。

また、「共話」について、初めは違和感を持っていたが、日本に長く住めば慣れるという認識があった。このような先輩日本語学習者としての意見は、日常生活における自然習得を可視化することができ、特に留学前教育として活用できるのではないかと見える。

さらに、頭の中で一生懸命文章を作っているのに、相槌や言い換えによって遮られてしまう、ゆっくり話していると日本人が文章が終わったと勘違いして話を進めてしまうといった学習者の意見は、日本人が知らないことが多いと思われるため、このような認識を可視化することにより、日本人にも考える機会を提供できるのではないかと期待できる。

かつて黒崎（1995）は、「共話」とは、話し手側の気配りと聞き手側の気配りによって成り立つものであり、日本語を学ぶ外国人には、理解しがたく習得しがたいものだと述べた。今回の模擬授業により、「気配り」の捉え方が学習者によって異なることが明らかになり、「気配り」が望ましいものであるという前提自体を問い直す必要性が示唆されたといえる。

6 おわりに

本研究では、「共話」の教育は技術というよりは「心の持ちよう」の教育であるとし、学習者一人一人は「共話」をどう捉えるのか、話し手はなぜ「共話」ををすると思うか、聞き手は「共話」をどう捉えていると思うかといったことを、具体的な会話場面を例に、「共話」について考える授業を行った。これにより、学習者が多様な認識を知ることができ、自分が考えてもいなかったような新たな視点で「共話」を捉えることができるようになったのではないかと見える。それこそが、「共話」の学びといえるのではないだろうか。技術を学び、上手に「共話」ができるようになったからといって、それが学習者が納得した上での言語行動となっているのかという点は保障できない。だからこそ、「共話」についてメタ的に考える授業というものが必要なものであり、「共話」の教育において学習者の認識に注目することが重要となるのである。

<参考文献>

- 黒崎良昭（1995）「日本語のコミュニケーション—共話について」『園出学園女子大学論文集 30-1』 pp.45-60.
- 笹川洋子（2007）「異文化コミュニケーション場面にみられる共話の種類」『神戸親和女子大学言語文化研究』 1, pp.17-40.
- ザトラウスキー・ポリー（1993）『日本語の談話の構造分析—勧誘のストラテジーの考察』日本語研究叢書 5, くろしお出版.
- 田所希佳子（2014a）「会話者意識を用いた意識化促進のためのコミュニケーション教育—スピーチレベルに関する授業実践を例に」『早稲田日本語教育実践研究』 2, pp.65-79.
- 田所希佳子（2014b）「自作映像教材を用いたスピーチレベル教育実践—より深い意識化を目指して」『待遇コミュニケーション』 11, pp.119-135.
- 田所希佳子（2015）「場面に重点を置いたコミュニケーション教育において評価の多様性に注目する意義」宇佐美洋編『「評価」を持って街に出よう』くろしお出版（印刷中）.
- 水谷信子（1980）「中・上級の読解教育」『日本語教育指導参考書 7 中・上級の話しことば教育』国立国語研究所, pp.53-143.
- 水谷信子（1983）「あいづちと応答」水谷修編『講座日本語と表現 3 話しことばの表現』筑摩書房, pp.37-44.
- 水谷信子（1993）「「共話」から「対話」へ」『日本語学』 12(4), pp.4-10.